総合都市研究　第67号　1998

港北ニュータウンにおける自然愛護活動とその参加者の自然観

1. はじめに
2. 地域の概要
3. 自然環境保全型の住民活動
4. 活動参加者の自然観の分析
5. むすび

高　野　ゆかり*
杉　浦　芳　夫**
原　山　道　子**

要　　約

港北ニュータウンでは、地権者が加わった住民参加のまちづくりが進められてきたが、新住民の声は必ずしも十分に反映されてこなかった。そのため、新住民の中で自然環境保全型のまちづくりに関心を持った人たちは、自然愛護会を組織した。港北ニュータウンには合計10の自然愛護会とそれを束ねる「港北ニュータウン緑の会」がある。これらの会では公園緑地の維持・管理、自然観察・調査などさまざまな自然愛護活動を展開している。会員たちの自然観を明らかにするために、81人の会員に配布したアンケート・データから得られる、自然を感じる「事物」と「状況」に関係する13の選択肢への反応パターンを数量化３類によって分析し、自然観の基本的次元を明らかにした。その結果、基本的次元は、「視覚とそれ以外の五感の対照性」、「受動的(鑑賞的)関わり方と能動的(接触的)関わり方の対照性」、「日常的事物嗜好と非日常的事物嗜好の対照性」、の三つから成り立っていることがわかった。この結果は、兵庫県三田市のニュータウンを対象にした研究結果と似たものであることもわかった。

1. はじめに

都市周辺部の丘陵地にみられるかつての宅地開発では、土地を削った大規模な地形改変が行なわれ、開発に際して公園などの緑地に自然林を残す配慮はほとんどみられなかった。しかし、現在の宅地開発では、単なる住宅供給ではなく、周辺の自然環境の質も考慮して開発が進められるようになってきた。そのため、丘陵地の地形や自然を保全した開発計画がとられるようになってきている。児玉・武内(1987)は、丘陵地における土地開発の改変型と保全型を比較し、現況地形、緑地を保全した開発は、自然環境の保全や良好な居住環境の創出のいずれの面でも優れているとしている。しかし、自然環境を保全した開発において問

*自衛隊
**東京都立大学大学院理学研究科

題となることは、その後のメンテナンス(管理)である。とくに、開発対象地域とされる緑地は、人間が農林業との関わりで人工的に育成してきた二次林(雑木林)である。二次林は、従来木々の間伐や下草刈りなど人の手が入ることで、良好な緑地環境を維持してきた。ところが、人の管理が行き届かなくなった二次林は、林内の荒廃が進み、貧弱な生態系になっていく。このような緑地は、居住者の生活空間にとっても望ましくない。こうした点において、自然環境保全型の開発では、計画・施工とともに、居住者側の視点も考慮する必要があるのである。

大規模開発（ニュータウン開発）における、緑地に対する居住者の意識を探った研究としては、既存緑地に対する居住者の接触頻度を調べたもの(上甫木・池口, 1994a)や、居住者による既存緑地の評価に関するもの(上甫木・池口, 1994b)がある。また、ニュータウン内の保存緑地に注目し、居住者の保存緑地に対する評価を考察した研究(権ほか, 1994)もみられる。いずれの研究も、居住者が緑地に期待する役割(緑地が持つ効果)を探り、緑地のあり方を考察している点に特徴がある。特定の緑地を対象とせず、ニュータウン居住者の自然志向と居住行動を分析した研究には、澤木(1994)のものがある。また澤木(1995)は、ニュータウン周辺地域の居住者の自然志向に基づいて緑地保全意識を分析し、居住者意識を通してニュータウン整備そのものを考察している。このように、宅地開発において地域の緑地を保全する場合、そこに居住する住民が、対象とする緑地をどのようにとらえているのかをみることが重要となる。

本稿では、地域の自然環境を住民がどのように意識しているのかを、住民活動を通してみることを目的とする。対象地域としては、計画当初から「みどりを最大限にいかしたまちづくり」を基本構想に掲げ、既存緑地を公園や緑道に残した開発を進めている、横浜・港北ニュータウン(港北ニュータウン事業誌編集委員会、1997)を選んだ。そして、当地域におけるこのような特徴的な開発が、居住者にどのように意識されているのかを、港北ニュータウンにおいて既存緑地の保全に関わっている「港北ニュータウン緑の会」とその傘下の公園愛護会の地域活動を通して検討することにしたい。

2．地域の概要

2．1　港北ニュータウン計画の現況

港北ニュータウンは横浜市の北部に位置し、開発開始当初は港北区に属していたが、現在は1994年に分区した都筑区に属している。地形的には、西は多摩丘陵、東は下末吉台地につながる標高10～80mの小高い丘陵地からなり、ほぼ中心を鶴見側の支流である早渕川が流れている。

港北ニュータウン計画は、1965年に横浜市の6大事業の一つとして発表された。ニュータウン計画地域は、二次林(雑木林)や竹林を主とした山林と田畑で地域の90%が占められていた。当時、郊外への乱開発が進み無秩序な住宅形成が進む中、この地域は幹線交通路から離れていたこともあり、生産性が高い近郊農業が営まれるとともに、ある程度まとまった規模の自然が残されていたため、何よりも無秩序な開発を防ぐことがこの計画の目的であった(港北ニュータウン事業誌編集委員会、1997)。横浜市は、港北ニュータウン計画の基本理念として、「乱開発の防止」、「都市農業の確立」、「市民参加のまちづくり」の三つを掲げた。これを受けて、港北ニュータウン方式と呼ばれる「市民参加のまちづくり」として、行政(横浜市)、事業主体（住宅・都市整備公団)、地域居住者（地権者）の三者による、港北ニュータウン開発対策協議会が発足した。これは、当地域の開発が土地区画整理事業を中心としたため、地域住民の意向をとりまとめる必要があったからである。この対策協議会を通して、ニュータウン計画の整備方針、地域住民の換地処分などの取りまとめが進められていった。そのため、現在の港北ニュータウンの建設には、地権者の意識も多少は反映されていると考えられる。ニュータウン地域は、住宅・都市整備公団の土地区画整理事業によって開発された市街化区域(早渕川を境にして、北部の第1地区と

南部の第２地区)と、「都市農業の確立」を図るためにニュータウンの南縁と北縁に設けられた農業専用地域、今後様子をみながら開発を進める市街化調整区域とに区分されている。このうち農業専用地域とは、農業継続者の意向を受けて、換地により市街化区域の周囲にまとまった規模の専用農地を集めたものである。

ところで、住宅・都市整備公団は、港北ニュータウンのまちづくりの基本方針として、「緑の環境を最大限に保存するまちづくり」、「ふるさとをしのばせるまちづくり」、「安全なまちづくり」、「高い水準のサービスが得られるまちづくり」の四つの目標を掲げ、公団施工地区における土地区画整理事業による造成工事を1975年に着手した。工事の終了は1985年に予定されていたが、前述したような住民参加の方式を採り入れ、何度も計画が変更されたこともあり、建設は大幅に遅れている。港北ニュータウンにおける、住宅・都市整備公団の分譲による集合住宅の入居は、1985年に始まった。当時、交通網はバスのみであったため、入居希望者は予定分譲戸数の３分の１にすぎなかった。その後、横浜市営地下鉄３号線の開通や道路網の整備が進み、また多機能複合都市を目指して研究所や企業を誘致したため、港北ニュータウン人口は1998年６月末日時点で92,600人になっている（「街づくり通信」９号による)。造成工事は約98%（1995年９月現在）終了しているが、住宅・都市整備公団から横浜市へ一部土地の移管が進まないことと、地主側の理由により、造成後の宅地や商業地への土地利用転換は約52%に留まっている。それでも、1998年４月にはセンター北駅前に「ショッピングタウンあいたい」、センター南駅前に「港北東急百貨店ショッピングセンター」がオープンし、ようやくニュータウンの中心ができあがりつつある。港北ニュータウンは、将来横浜市の副都心の一つに位置づけられており、業務核都市形成を目指した整備が今後も進められていくことになっている。

２．２　港北ニュータウンの緑地

（１）緑地計画

港北ニュータウンでは「緑の環境を最大限に保存するまちづくり」、「ふるさとをしのばせるまちづくり」として、現況地形を生かし、既存緑地(二次林)を、緑道、公園、私有地や公共地の保存緑地として残している。しかし、当地域は土地区画整理事業により開発された結果、保存しうる現況地形や確保される公園緑地が限定され、限られた空間における緑地の保存が計画者、施工者の課題であった（春原ほか，1989）。既存緑地にはコナラ・シラカシ等の二次林や竹林が主に生育し、優れた樹種がみられなかったため、植生側の要因よりも、寺社林、屋敷林や民家といった歴史・文化的なものが残る谷戸部分と斜面の一体的な景観を重視した緑地保全が行なわれた。そして、公園・寺社の緑と文化財を、谷戸部分に沿って体系的につなぎ、グリーン・マトリックスと名づけ、緑道には池などの水辺環境も整備された。グリーン・マトリックスは、オープンスペースを有効に活用し、都市防災対策にも考慮した計画とされる。その他、限られた空間で緑地を活用するために、緑道に接する斜面緑地を保全することで、広々とした緑地空間の創出が図られている。緑道や緑地に面する住宅との間には、敷地の一定面積を、庭や生け垣に提供することを規定したまちづくり協定が結ばれ、美しい町並みの保存が重視されている。図１は、港北ニュータウンの市街化区域における公園、緑道と保存緑地の位置を示している。公園・緑道予定地とされている場所は、整備が遅れている第１地区に多い。街区公園（標準面積0.25ha）は、周辺住民の入居時期に合わせて整備されるため、街区公園が少ないところは、入居が進んでいない地域といえる。

（２）公園と保存緑地

既存緑地を残した公園整備は、総合公園(標準面積10～50ha）や、地区公園（同４ha)・近隣公園（２ha）の一部にみられる。横浜市では、公園の完成とともに、行政との連絡口を兼ねた地域の町内会や自治会を中心に、地元へ公園愛護会の結成が依頼される。公園愛護会の作業内容は、公園利用の管理や清掃が中心だが、年３回の活動報告書

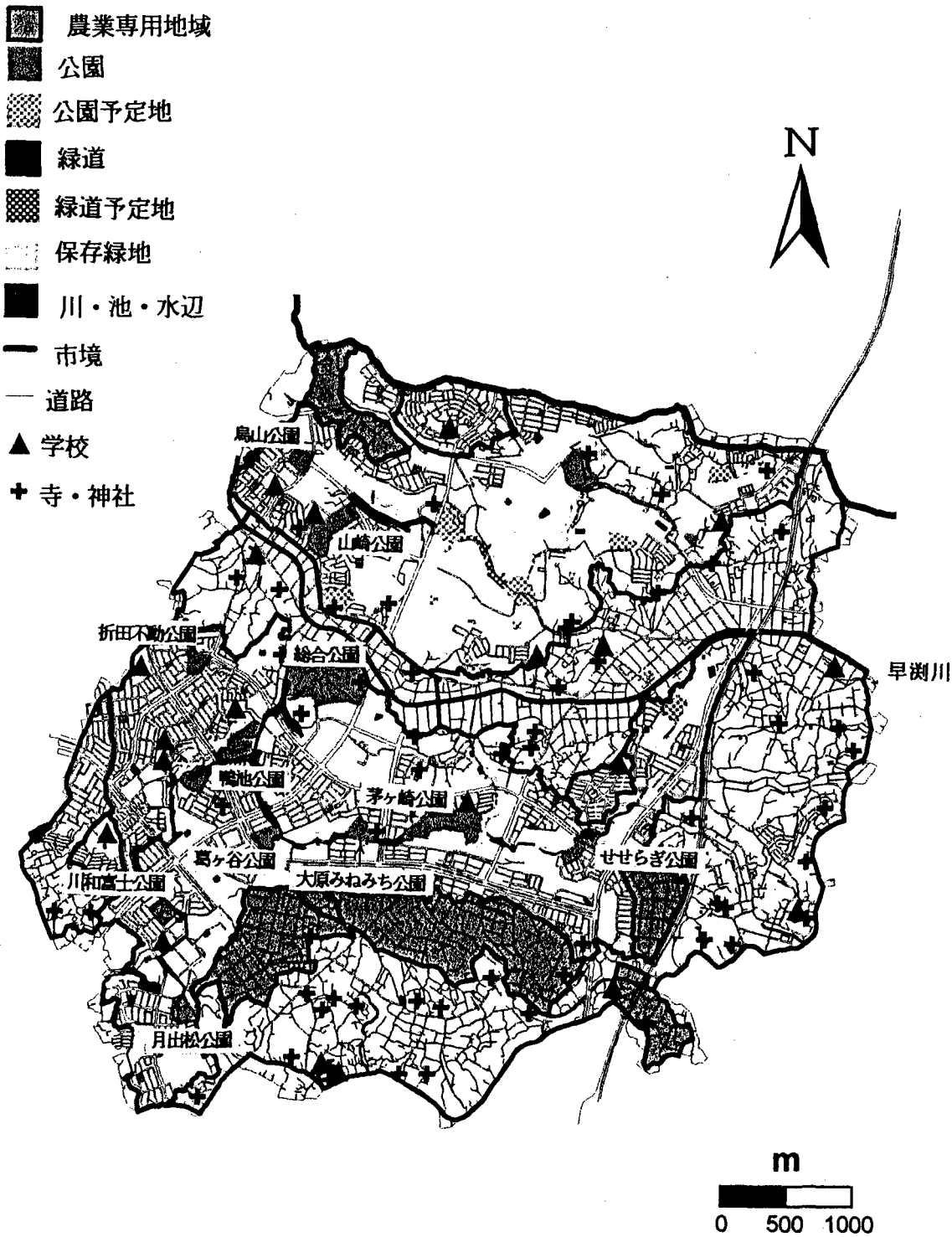

図1　港北ニュータウンにおける公園・緑地の配置

の提出も義務づけられている。横浜市では、公園の面積に応じて愛護会補助費用が支払われるが、上限が規定されており(上限面積1.8haで、それ以上の面積の公園に対しては一律年間71,000円が支給される)、大規模な公園に公園愛護会が結成されることはあまり想定されていない。大規模公園に公園愛護会が設立されている地域は、横浜市内にいくつかみられるが、公園の管理や清掃を中心とする会が多い。その中で、港北ニュータウンの近隣公園・地区公園にみられる公園愛護会は、雑木林や竹林の間伐、下草刈りという既存緑地の管理にまで及んでいる点で特異である。

横浜市では、「緑の環境をつくり育てる条例6条、7条」に基づき、横浜市と保存緑地の所有者の間で、緑地保存の協定を結んでいる。保存緑地は、緑道・公園に接した集合住宅や研究所などの企業、学校などの施設に設定されている。保存緑地の所有者には、緑地を管理・維持する代わりに、緑地にかかる課税額相当のものが保全に対する奨励金として交付されている。しかし、管理・維持の方式は、それぞれの所有者に任されているため、整備状況はさまざまである。業者委託は経費がかかるため、保存緑地の整備を今後どのように行なうのかが、居住者側の問題となっている。現在、雑木林の管理に対して、一部の集合住宅では勉強会が催され、港北ニュータウンにおける保存緑地の管理が見直されている。なお、市街地(港北ニュータウン)に保全されている自然緑地は、横浜市市街地環境設計制度という保存緑地とは異なる制度でも管理されている(片受・高橋、1995)。

3．自然環境保全型の住民活動

3．1　住民組織

（1）港北ニュータウン緑の会

1992年に、港北ニュータウンにおける自然環境保全型の既存5団体の連合組織として、「港北ニュータウン緑の会」が結成された。既存5団体とは、1985年以降港北ニュータウンに新たに移ってきた住民によって作られた、地域の自然を学び、保全しようとする、「モルフォ生物同好会」、「けやきが丘森林愛護会」、「鴨池公園愛護会」、「自然に学ぶ会」、「ファミールグリーン会」の五つの会である。現在では、これらの会に加え、新たに五つの会が加わり、合計10の会が参加している（図2）。主に南部の第2地区を活動拠点としている会が多いが、これは、第2地区の造成工事の進み具合が早く、入居開始も早かったことと関係している。

港北ニュータウン計画の基本理念である「住民参加のまちづくり」に、新しく移り住んできた住民の声が含まれないことへの疑問が、「港北ニュータウン緑の会」の成立の契機となっている。この会は、公園をキーワードにし、港北ニュータウンにおける住民の自主的な公園管理や愛護会結成について啓蒙する組織として活動しており、その活動を通して住民参加のあり方を考えていこうとしている。通常の活動としては、自然観察会やフォーラムを催し、地域住民が港北ニュータウンの自然に触れる機会を提供している。現在は、港北ニュータウン中心に位置する総合公園の整備をめぐり、住民参加の公園づくりを行政に呼びかけている。しかし、雑木林や竹林を大幅に保全した公園では、木々の伐採や下草刈りなど管理が困難となる。そのため、行政との意見調整のための折衝が何度かもたれ、「港北ニュータウン緑の会」では従来の雑木林や竹林・草花を残した開発を訴える代わりに、これらの雑木林・竹林の手入れを積極的に進めていきたいと提案している。結局、「港北ニュータウン緑の会」の意見も採り入れられ、総合公園の一部を保護区とし、現植生を破壊するような造成工事は行なわない運びとなったが、大規模な公園の管理をどこまで住民ボランティアに依存することができるのかという点については、行政側の検討課題となっている。

（2）各会の活動

「港北ニュータウン緑の会」に参加している各会を、活動対象別にまとめると表1のようになる。保存緑地を対象にした会は、「けやきが丘森林愛護会」、「ファミールグリーン会」の二つである。

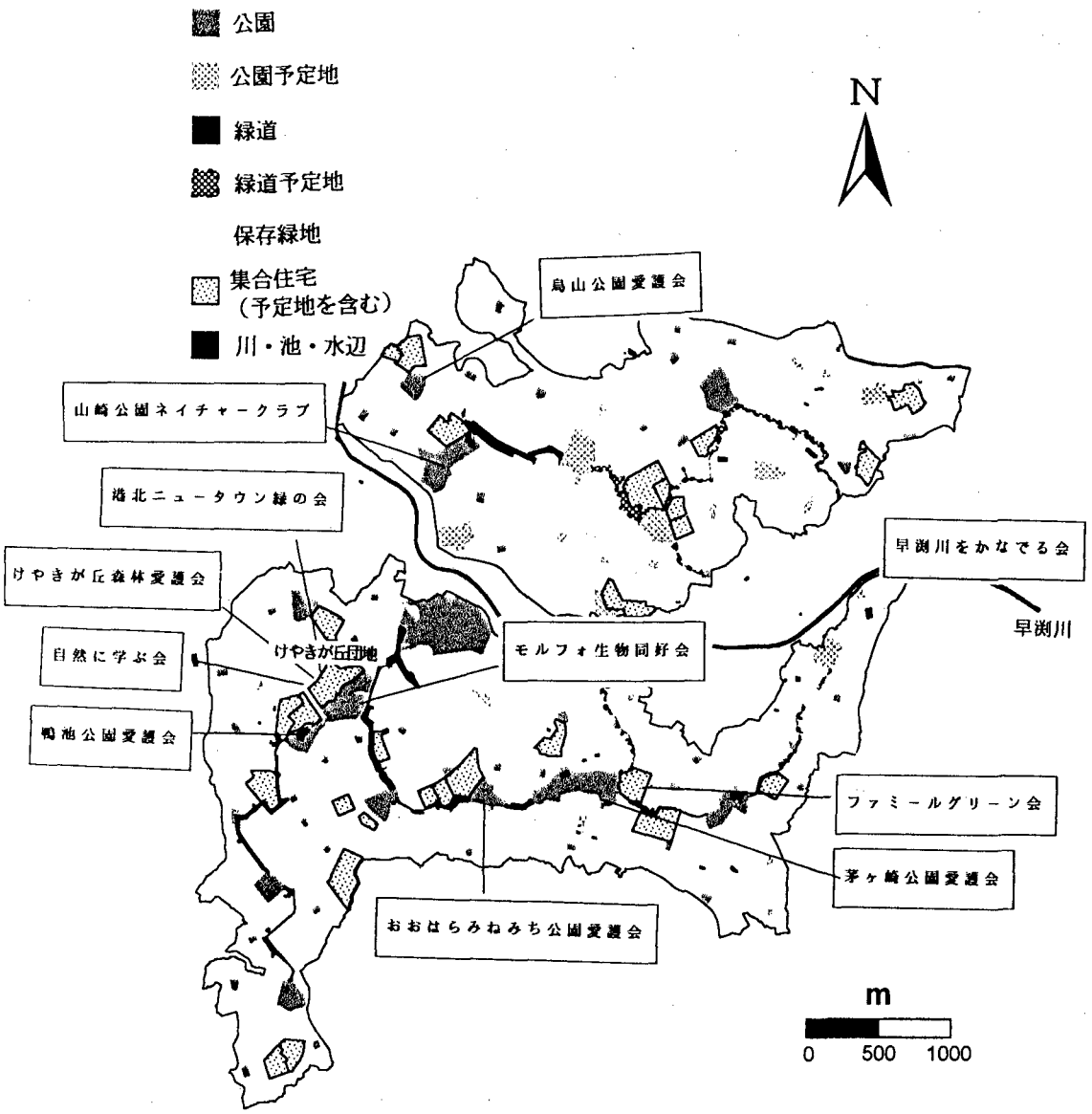

図2　港北ニュータウンにおける自然愛護会の分布

活動内容は主に雑木林・竹林の手入れを中心とする。「けやきが丘森林愛護会」は10年近い活動実績をあげており、自然環境保全に貢献したとして、横浜市や神奈川県の地域活動における表彰を受け、住民による森林管理の実績が認められた会である。「ファミールグリーン会」は、「けやきが丘森林愛護会」に比べ会員数が少ないため、活動の幅が制限されている。雑木林や竹林の手入れのほか、団地内の花の植栽も行なうなど、自治会活動の一環として活動している側面がみられる。

公園を対象にした会は、「鴨池公園愛護会」、「烏山公園愛護会」、「山崎公園ネイチャークラブ」、

表1　港北ニュータウンにおける自然愛護会の活動（1995年時点）

活動対象	団体名（活動日）	成立年	会員数	活動内容
保存緑地	けやきが丘森林愛護会（月1回）	1984	90家族	けやきが丘団地共有の竹林や雑木林の手入れ（竹の間伐、下草刈り）。団地住民の親睦を兼ねた「まつり」も主催。 資金：団地管理組合から補助金、横浜市の環境保全基金。
	ファミールグリーン会（月1回）	1992	20家族	ファミールハイツ共有の竹林や雑木林の手入れ（竹の間伐、下草刈り）。マンションの花壇へ花を植栽。 資金：団地管理組合から補助金。
公園	鴨池公園愛護会（月1回）	1986	90家族	公園の竹林や雑木林の手入れ(竹の間伐、下草刈り)。自然観察会や竹細工教室などのイベントを主催。 資金：会費（500円／永年)、横浜市の公園愛護会費、横浜市の環境保全基金。
	港北ニュータウン緑の会（月1回）	1992	90名	公園愛護会活動を啓蒙。自然観察会やフォーラムを主催。各会の活動をまとめた会報誌を出す。 資金：会費（1,000円／年)
	烏山公園愛護会（月1回）	1993	40名	公園の竹林の手入れ(竹の間伐)。自然観察会や竹細工教室などのイベントを主催。毎月会報誌を出す。 資金：会費（1,000円／年)、横浜市の公園愛護会費。
	山崎公園ネイチャークラブ（月1回）	1994	10数名	公園の清掃。
	茅ヶ崎公園愛護会（成立準備中）	1995		
	大原みねみち公園愛護会（成立準備中）	1995		
生物	モルフォ生物同好会	1956		代表者（生物学者）が、小中学生を対象に生物の研究指導。現在では、個人で他の会の自然観察会や調査に参加。 資金：なし。
	自然に学ぶ会（不定期）	1991		代表者を中心とし、生物の調査研究や自然観察会を行なう。現在、タヌキの生態調査に取り組む。会報誌を出す。 資金：なし。
川と歴史	早渕川をかなでる会（不定期）	1994	40名	川づくりの勉強会、川歩き、掃除（イベントとして）を行なう。親水公園づくりをめざしている。会報誌を出す。 資金：横浜市の河川局の特別なイベント費、会費。

資料出典：聞き取り調査により作成。

「茅ヶ崎公園愛護会」、「大原みねみち公園愛護会」の五つである。近隣公園や地区公園を活動対象地域としているため、保存緑地並みに雑木林・竹林の伐採や下草刈りなどの手入れを行なっている会もある。「鴨池公園愛護会」は成立年数も古く、横浜市の環境保全に関わる表彰も受け、実績を上げている。「けやきが丘森林愛護会」と重複している会員も多いが、公園という公共用地を生かして自然観察会、木々や生物相の調査も行ない、活動の幅を広げている。鴨池公園の植物や動物を写真に撮り、絵はがきを作り、それを販売して活動資金に回している。雑木林や竹林の手入れを本格的に行なう会としては、もう一つ「烏山公園愛護会」があげられる。この会の活動の対象地域である烏

山公園は第1地区にあり、面積は鴨池公園よりかなり小さく、グリーン・マトリックスから切り離された形で、住宅地の中にぽっかりと小島のように残されている。この会は、地域とのコミュニケーションを重視しており、毎月ミニコミ誌を発行して図書館等に置き、会の活動内容を他の人にも知らせることで、近隣の町内会や自治会の理解と協力を得ることを心がけている。公園のゴミ拾いなどの清掃活動を中心とした「山崎公園ネイチャークラブ」は、参加者が少ないこともあり、活動の幅は狭い。「茅ヶ崎公園愛護会」と「大原みねみち公園愛護会」は、現在愛護会をつくる準備段階にあり、参加者の勧誘や今後の方針などが検討されている。

生物一般を対象にした会は、「モルフォ生物同好会」、「自然に学ぶ会」の二つである。ともに代表となる人物が1名おり、動物や植物の調査を行なっている。「モルフォ生物同好会」は、小・中学生を対象に生物研究指導を行なう会である。現在は、代表者が高齢のため子どもたちの指導は別の人に任せ、自身は、他の団体の活動に参加して調査を進めている。「自然に学ぶ会」は、特定の活動日を設けていないが、現在港北ニュータウンにわずかにみられるタヌキの生態調査を中心に活動が行なわれている。会費をとらないため、会員数は明確に把握されていない。この二つの会は、かなり専門性が高い生物調査を行なっているのが大きな特徴である。

川と歴史を対象とする会は、「早淵川をかなでる会」である。川づくりの勉強会や観察会を中心に行ない、川づくりを通してまちづくりへの提言を行なっている。早渕川は、ニュータウン開発にあたり、増水に備えて河川改修が行なわれ、コンクリート護岸工事がなされた。そのためフェンスも設けられ、親水性に乏しい河川となってしまった。人工的な河川整備ではない、親水性を重視した河川整備が近年注目されている中、早渕川も親水性を考慮した整備が進められるよう、この会は長期的な視野で、緑地、川、(人間の) 歴史の三者を通して人間活動と自然の関わりをとらえようとしている。この会は、自然をテーマにしつつ、まちづくりそのものを考えている点で、「港北ニュータウ

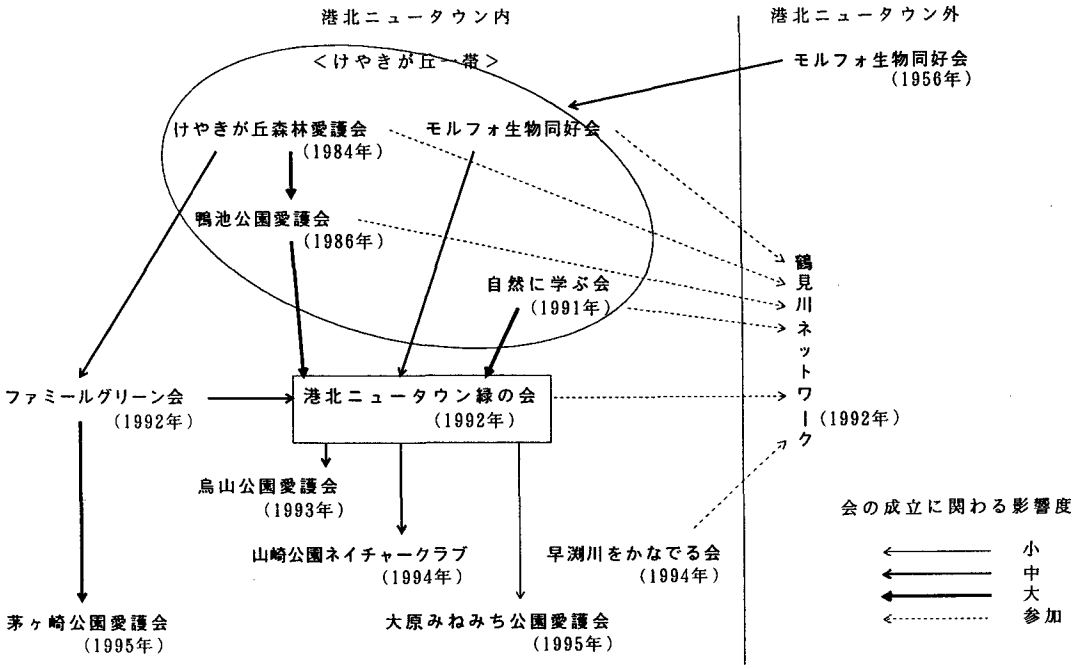

図3　港北ニュータウン内の自然愛護会の成立過程

ン緑の会」傘下の地元地域を対象とした他の会とは異なった性格を持つといえよう。

3．2　住民活動の広がり

（1）「港北ニュータウン緑の会」の成立

各会の成立の過程は、図3に示してある。最も成立年代が早いものは「モルフォ生物同好会」である。会の代表者は当初ニュータウン外に居住していたが、港北ニュータウン造成時から当地域で生物調査等を進めていた。後に港北ニュータウンへ引っ越し、他の団体の観察会に参加し、自ら指導を行なうようになっている。

他の10の会は、港北ニュータウン造成後、港北ニュータウンに引っ越してきた新しい住民が設立したものである。最初に入居が始まったのは、住宅・都市整備公団が分譲したけやきが丘団地(荏田地区)一帯である。けやきが丘団地の保存緑地の管理をめぐり住人同士で意見が分かれ、当初「小竹林委員会」というものが作られた。その後、この会が「けやきが丘森林愛護会」となり、住人有志によって竹林や雑木林の手入れを行なうことになった(永田、1990)。けやきが丘団地の保存緑地と接している鴨池公園は、雑木林を残した地区公園である。「けやきが丘森林愛護会」の活動の続きとして、公園の手入れを行なう目的で組織されたのが「鴨池公園愛護会」である(永田、1990)。近隣の集合住宅・戸建住宅住民に参加を呼びかけた結果、けやきが丘団地周辺の4団地を含む住民が参加した。「ファミールグリーン会」は、元けやきが丘団地の住民が、丸紅が分譲したファミールハイツに引っ越した後始めた会である。住民は、「けやきが丘森林愛護会」所属時には、活動にあまり参加していなかったが、ファミールハイツの保存緑地が荒れた状態であったため、気にかかり活動を始めたという。そして、以前から自然観察・自然保護に関わってきた人物による「自然に学ぶ会」を含めた、これら五つの会が集まり「港北ニュータウン緑の会」が結成されたのである。

（2）「港北ニュータウン緑の会」成立後

「港北ニュータウン緑の会」は、当時新聞の地域欄でかなり取り上げられたため、その存在は多くのニュータウン住民に認知されていたと思われる。「港北ニュータウン緑の会」は、以前から自分の地域でも活動を起こしたいと考える人にとって、一つのきっかけを与えることになった。「烏山公園愛護会」、「山崎公園ネイチャークラブ」、「大原みねみち公園愛護会」は、その影響のもとにでき、「港北ニュータウン緑の会」が関わって成立した事例といえる。「港北ニュータウン緑の会」は、住民による雑木林や竹林の手入れ・管理活動に実績を持っていたため、新たな公園愛護会設立に際し、援助や助言を提供することが可能であった。「茅ヶ崎公園愛護会」は「ファミールグリーン会」の会員が中心となり、ファミールハイツに隣接している地区公園を活動対象にしている。「早渕川をかなでる会」は、他の団体が主催した「早渕川フォーラム」に参加した人々が、それをきっかけに地域の問題に取り組もうと始めた会である。会員は、港北ニュータウン内に広く散らばっている。

「港北ニュータウン緑の会」は、それ自身で自然愛護のネットワークを成立させているが、港北ニュータウン外の自然環境保全活動を行なっている団体とも関わりを持っている。その団体は、鶴見川流域の数十団体が参加している「鶴見川ネットワーク」である。とくに「早渕川をかなでる会」が川という対象を同じくする点で、つながりは深い。しかし全体的にみて、各会の活動は港北ニュータウン内で完結する傾向にあるといえる。

4．活動参加者の自然観の分析

4．1　参加者の属性

自然環境保全に関わる活動に参加する人々が、港北ニュータウンの自然をどうとらえているのかを明らかにするため、「烏山公園愛護会」、「鴨池公園愛護会」、「ファミールグリーン会」、「早渕川をかなでる会」の四つの会を中心に、1995年11月に自然に関する意識調査アンケートを行なった。これら四つの会を取り上げた理由は、第1地区と第2地区での公園愛護活動の違い、公園や保存緑地

を対象とした活動、川を対象とした活動等、性格を異にする会を横断的に検討するためである。そして、これら四つの会以外で、アンケートに回答をいただいた数名の方を、「その他の会」への参加者としてまとめた。アンケート内容は、個人の自然観や、港北ニュータウンの緑をどうとらえているのか、また重視している自然は何かを尋ね、活動に参加している人々が港北ニュータウンの緑に対してどのような意識を抱いているのか、等々からなっている。また、各会について、会員の会への参加理由や活動状況も尋ねている。

アンケート配布方法は、「鴨池公園愛護会」では、活動参加日に参加者に直接アンケート票へ記入してもらい、その場で回収した。その他の団体では、各会で出している会報誌などに添えてアンケート票を配布し、郵送回収とした。各団体におけるアンケート配布数と回答率、また個人属性は、表2にまとめてある。回答率は35～100%と各会ごとに

表2　アンケート回答者の個人属性

団体名		烏山公園愛護会	鴨池公園愛護会	ファミールグリーン会	早渕川をかなでる会	その他の会	計
アンケート配布数		45	21	24	40	10	140
回答数		29	21	13	14	4	81
回答率		64.4%	100.0%	54.2%	35.0%	40.0%	57.9%
性別	男	12 (41.4)	16 (76.2)	13(100.0)	9 (64.3)	2 (50.0)	52 (64.2)
	女	17 (58.6)	5 (23.8)	0 (0.0)	5 (35.7)	2 (50.0)	29 (35.8)
	計	29(100.0)	21(100.0)	13(100.0)	14(100.0)	4(100.0)	81(100.0)
年齢	10代	1 (3.4)	1 (4.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.5)
	20代	0 (0.0)	1 (4.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.2)
	30代	6 (20.7)	3 (14.3)	2 (15.4)	4 (28.6)	0 (0.0)	15 (18.5)
	40代	11 (37.9)	8 (38.1)	8 (61.5)	5 (35.7)	3 (75.0)	35 (43.2)
	50代	6 (20.7)	8 (38.1)	1 (7.7)	3 (21.4)	1 (25.0)	19 (23.5)
	60代～	5 (17.2)	0 (0.0)	2 (15.4)	2 (14.3)	0 (0.0)	9 (11.1)
	計	29(100.0)	21(100.0)	13(100.0)	14(100.0)	4(100.0)	81(100.0)
職業	会社員(男性)	11 (37.9)	15 (71.4)	11 (84.5)	7 (50.0)	2 (50.0)	46 (56.8)
	自営業(男性)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (7.1)	0 (0.0)	1 (1.2)
	就業主婦	5 (17.2)	1 (4.8)	0 (0.0)	5 (35.7)	0 (0.0)	11 (13.6)
	専業主婦	12 (41.4)	4 (19.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (50.0)	18 (22.2)
	その他	1 (3.4)	1 (4.8)	2 (15.4)	1 (7.1)	0 (0.0)	5 (6.2)
	計	29(100.0)	21(100.0)	13(100.0)	14(100.0)	4(100.0)	81(100.0)
住宅の種類	戸建て	7 (24.1)	1 (4.8)	0 (0.0)	3 (21.4)	3 (75.0)	14 (17.3)
	アパート	1 (3.4)	2 (9.5)	0 (0.0)	2 (14.3)	0 (0.0)	5 (6.2)
	集合住宅(分譲)	13 (44.8)	16 (76.2)	13(100.0)	6 (42.9)	1 (25.0)	49 (60.5)
	集合住宅(賃貸)	6 (20.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (21.4)	0 (0.0)	9 (11.1)
	その他	2 (6.9)	2 (9.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (4.9)
	計	29(100.0)	21(100.0)	13(100.0)	14(100.0)	4(100.0)	81(100.0)

注）カッコ内の数字は%である。

バラツキがあり、平均するとほぼ60%である。性別では、「烏山公園愛護会」を除き、他の三つの会では男性の割合が高い。年齢は40歳代以上が多く、若い世代の参加は少ない。職業は、男性はほとんどが会社員、女性は専業主婦が多い。住宅の種類は、分譲の集合住宅に住んでいる人が過半数以上を占めている。つまり、アンケート回答者は、庭をほとんど持たない分譲の集合住宅に住む中高年の男性会員が多いといえよう。

（1）港北ニュータウンのみどりについて

港北ニュータウンを居住地に選択した理由を尋ねたところ(表3)、「緑が多い」、「自宅の周囲に緑がある」という理由が多く回答された。次いで、「住宅の広さ」、「価格が手ごろだった」という住宅関連の理由があげられているが、これは「鴨池公園愛護会」を除いた他の会に比較的多くみられる。概して、港北ニュータウンの緑が、居住地選択に際して無視できない要因であったといえる。

そこで、港北ニュータウンに多いと思われる緑について尋ねたところ(表4)、「緑道」や「公園の樹木」をあげる人が多かった。次いで、「私有地の保存緑地」や「造成前の樹木」があげられている。いずれも、港北ニュータウンで目に触れる機会が多いものである。「田や畑」は回答率が低いが、これは、市街化区域外に農業専用地域としてまとめられ、市街化区域内の生産緑地も小規模に散在しているため、田畑が人々の目に触れる機会が少ないからであろう。「早渕川をかなでる会」では、「田や畑」をあげた人が多いが、早渕川の周囲は市街化調整区域で、田や畑を目にする機会があることと関係していると思われる。

第2章で港北ニュータウンの緑地計画について述べたが、この計画的な緑地造成を、住民がどのように考えているのかを、港北ニュータウンにおける「緑の量」と「緑の質」への満足度として尋ねた。回答結果は表5・6に示してある。緑の量では、「やや満足」を加えると大半が「満足」と答えている。「やや不満」と答えているのは、「烏山公園愛護会」の会員に多かった。これは、北部の第1地区にある烏山公園がグリーン・マトリックスから外れていることと関係していると思われる。

表3　港北ニュータウンを居住地に選択した理由（複数回答）

団体名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	計
烏山公園愛護会	1	4	6	0	1	2	8	5	5	12	11	2	0	1	7	65
鴨池公園愛護会	0	2	2	0	2	2	2	4	1	13	13	2	0	2	4	49
ファミールグリーン会	0	0	2	0	0	1	6	3	2	7	11	3	0	0	4	39
早渕川をかなでる会	1	0	3	1	0	0	5	4	2	6	5	2	1	1	5	36
その他	0	1	0	1	0	0	1	0	0	4	3	2	0	0	1	13
計	2	7	13	2	3	5	22	16	10	42	43	11	1	4	21	202
(%)	(1.0)	(3.5)	(6.4)	(1.0)	(1.5)	(2.5)	(10.9)	(7.9)	(5.0)	(20.8)	(21.3)	(5.4)	(0.5)	(2.0)	(10.4)	(100.0)

＜選択肢の内容＞

1. 元々住んでいた
2. 職場が近い
3. 交通が便利
4. 公共サービスが整っている
5. 住宅のデザイン
6. 敷地の広さ
7. 住宅の広さ
8. 価格が手頃だった
9. 町並みの美しさ
10. 自宅の周囲に緑がある
11. 緑が多い
12. 教育環境に良い
13. 商業施設が近い
14. 特に理由はない
15. その他

表4　港北ニュータウンで多いと思われる緑（複数回答）

団体名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
烏山公園愛護会	4	7	14	18	6	5	9	15	5	83
鴨池公園愛護会	0	2	14	13	2	3	11	4	2	51
ファミールグリーン会	2	2	8	10	1	3	8	5	1	40
早渕川をかなでる会	1	2	11	9	9	5	3	5	1	46
その他	0	2	3	3	0	1	0	1	1	11
計	7	15	50	53	18	17	31	30	10	231
(%)	(3.0)	(6.5)	(21.6)	(22.9)	(7.8)	(7.4)	(13.4)	(13.0)	(4.3)	(100.0)

＜選択肢の内容＞

1. 既存住宅の庭や生け垣の木や草花
2. 道路沿いの樹木
3. 緑道
4. 公園の樹木
5. 田や畑
6. 寺や神社の緑
7. 私有地の保存緑地
8. 造成前の樹木
9. その他

表5　港北ニュータウンにおける緑の「量」への満足度

団体名	満足	やや満足	ふつう	やや不満	不満	無回答	計
烏山公園愛護会	1	10	3	12	3	0	29
鴨池公園愛護会	4	9	2	1	2	3	21
ファミールグリーン会	2	6	2	2	1	0	13
早渕川をかなでる会	5	7	1	1	0	0	14
その他	2	1	0	0	1	0	4
計	14	33	8	16	7	3	81
(%)	(17.3)	(40.7)	(9.9)	(19.8)	(8.6)	(3.7)	(100.0)

表6　港北ニュータウンにおける緑の「質」への満足度

団体名	満足	やや満足	ふつう	やや不満	不満	無回答	計
烏山公園愛護会	0	8	3	15	2	1	29
鴨池公園愛護会	1	9	2	3	3	3	21
ファミールグリーン会	1	5	2	2	2	1	13
早渕川をかなでる会	3	5	4	1	1	0	14
その他	1	1	1	1	0	0	4
計	6	28	12	22	8	5	81
(%)	(7.4)	(34.6)	(14.8)	(27.2)	(9.9)	(6.2)	(100.0)

緑の質に関しては、「満足(やや満足を含む)」と「不満(やや不満を含む)」の回答数に顕著な差はみられない。これも、「烏山公園愛護会」の会員の多くが、「不満」と答えているためである。アンケート票の設問では、特定の緑を想定した聞き方をしていないが、港北ニュータウンの緑について、第1地区と第2地区で異なる印象が持たれていることがわかる。

（2）活動への参加について

「自然をテーマとした活動」と限定した上で、どの会に参加しているかを尋ねた(表7)。複数の会に参加している人は、「鴨池公園愛護会」、「ファミールグリーン会」、「早渕川をかなでる会」に多い。「鴨池公園愛護会」の半数以上の会員は、「けやきが丘森林愛護会」と「港北ニュータウン緑の会」の両方に加入している。「ファミールグリーン会」では、半数近くが「茅ヶ崎公園愛護会」ないしは「港北ニュータウン緑の会」に加入している。一方、「早渕川をかなでる会」は、「その他」(「港北ニュータウン緑の会」以外の活動)に参加する会員が多く、「川」を対象とした会や自然環境保全一般の活動などに多くの回答が寄せられ、港北ニュータウン内の他の会との関わりは薄い。「烏山公園愛護会」は、会の代表者が「港北ニュータウン緑の会」へ参加しているが、港北ニュータウン

の他の会に参加している会員は少ない。個々の会員間のつながりはあまりみられず、第２地区の会との間にほとんど接触がみられない。

各会に参加した動機(表８)は、「以前から自然に関わる活動に興味をもっていた」という回答が半数以上を占めた。次いで「活動内容に興味を持って」、「地域のつきあいとして」、「地域の自然環境に不満があって」という動機があげられている。いずれにしても、自然環境に対する興味や関心が、参加する一番の動機であることがわかる。とくに男性ほど、この傾向が顕著である。

４．２　数量化３類による自然観分析

各会の会員の自然観をとらえるために、「どんな時に自然を感じるか」という問を設け、自然を感じる「事物」と「状況」に留意した13の選択肢か

表７　自然環境保全型の活動への参加（複数回答）

団体名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
烏山公園愛護会	0	0	0	0	0	28	0	2	0	0	3	2
鴨池公園愛護会	0	11	21	1	0	0	0	0	0	0	11	1
ファミールグリーン会	0	1	0	0	13	0	0	0	5	0	5	1
早渕川をかなでる会	0	0	0	0	0	0	0	14	0	0	2	9
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	0
計	0	12	21	1	13	28	0	16	5	3	23	13

＜選択肢の内容＞

1. モルフォ生物同好会
2. けやきが丘森林愛護会
3. 鴨池公園愛護会
4. 自然に学ぶ会
5. ファミリーグリーン会
6. 烏山公園愛護会
7. 山崎公園ネイチャークラブ
8. 早瀬川をかなでる会
9. 茅ヶ崎公園愛護会
10. 大原みねみち公園愛護会
11. 港北ニュータウン緑の会
12. その他（港北ニュータウン緑の会以外）

表８　会の活動に参加した動機（複数回答）

団体名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
烏山公園愛護会	11	1	3	7	7	3	18	2	1	3	56
鴨池公園愛護会	8	3	4	4	5	2	11	3	5	3	48
ファミールグリーン会	4	3	2	6	3	2	6	1	2	1	30
早渕川をかなでる会	3	1	4	3	2	1	7	0	3	2	26
その他	1	0	1	2	1	0	1	0	0	0	6
計	27	8	14	22	18	8	43	6	11	9	166
(%)	(16.3)	(4.8)	(8.4)	(13.3)	(10.8)	(4.8)	(25.9)	(3.6)	(6.6)	(5.4)	(100.0)

＜選択肢の内容＞

1. 活動内容に興味をもって
2. 子どもの教育を兼ねて
3. 友人に誘われて
4. 地域のつきあいとして
5. 地域の自然環境に不満があって
6. 時間に余裕があった
7. 以前から自然に関わる活動に興味をもっていた
8. 前住地でも自然に関わる活動を行なっていた
9. 港北ニュータウンに移って、自然に関わる活動を行なっていた
10. その他

ら該当するものを複数回答で答えてもらった。単純集計結果は、表9に示すとおりである。全体として、「木々の間を散歩している時」、「茂った木の葉や青草の匂いをかいだ時」、「壮大な自然景観を目の前にした時」、「鳥の鳴き声や虫の声などを聞いた時」に、回答が多い。これらは、触覚・嗅覚・視覚・聴覚という五感に関係したものといえる。「～を見た時」という選択肢に注目すると、「水のせせらぎ」、「林」、「木や草の緑」を眺めた時に、比較的回答が多い。各会による回答の違いはほとんどないが、「早渕川をかなでる会」の場合、「その他」に回答した割合が他の会よりも多く、多様な自然観がみられる。

次に、13の選択肢に対する回答パターンの基本構造を求めるために、データが0－1型の質的なものであることを考え、数量化３類(質的なデータに対する因子分析に相当)を用いて分析を試みた。13の選択肢の中で、「その他」という選択肢に14名が回答しているが、その内容をみると、「風を感じる時」、「木のつるや実を拾った時」など多様な答え方をしている。そのため、数量化３類の分析に際しては、「その他」を除いた12の選択肢への回答を分析データとして採用した。

検討の対象となる軸の数に関しては、固有値の値の変化に注目し、第５軸までを採用した。各軸の説明寄与率は、第１軸17.0%、第２軸14.3%、第３軸13.6%、第4軸11.7%、第５軸10.1%であり、第５軸までで全分散の３分の２が説明されている。しかし、各軸の内容を検討してみると、第１軸と第４軸、第３軸と第５軸に類似性がみられ、第３軸までで十分説明されると判断し、累積説明寄与率は50%弱と下がるが、第３軸までを考察の対象とした。

各軸ごとに、12の選択肢の得点(以下カテゴリースコアと呼ぶ)が求められるため、このカテゴリースコアを用い、軸の解釈を行なうことができる。図４に第１軸と第２軸の、図５に第１軸と第３軸のカテゴリースコアの分布を示してあるが、本稿ではカテゴリースコアの絶対値の大きなものに注目して解釈を進める。

まず第１軸において、プラスの高い値をもつものは、「魚の泳ぐ川を目にした時」、「タヌキなどの小動物をみかけた時」、「昆虫採集などで生物と接した時」である。いずれも動物を見ることに関係している点で共通性がある。他方、マイナスの高い値をもつものは、「茂った木の葉や青草の匂いを

表９　どんな時に自然を感じるか（複数回答）

団体名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	計
烏山公園愛護会	6	13	16	22	10	19	12	9	3	19	20	24	7	180
鴨池公園愛護会	7	8	10	18	8	13	7	5	6	12	10	15	1	120
ファミールグリーン会	3	6	5	8	5	7	7	4	3	7	5	8	0	68
早渕川をかなでる会	4	6	5	11	3	10	6	4	4	7	8	12	6	86
その他	1	3	3	4	2	3	1	1	0	3	1	2	0	24
計	21	36	39	63	28	52	33	23	16	48	44	61	14	478
(%)	(4.4)	(7.5)	(8.2)	(13.2)	(5.9)	(10.9)	(6.9)	(4.8)	(3.3)	(10.0)	(9.2)	(12.8)	(2.9)	(100.0)

＜選択肢の内容＞

1．美しい花をながめた時
2．木や草の「緑」をながめた時
3．林をながめた時
4．木々の間を散歩している時
5．魚の泳ぐ川を目にした時
6．壮大な自然景観を目の前にした時
7．鳥やトンボなどの飛ぶ姿を見たとき
8．タヌキなどの小動物をみかけた時
9．昆虫採集などで生物と接した時
10．鳥の鳴き声や虫の声などを聞いた時
11．水のせせらぎを目にした時
12．茂った木の葉や青草の匂いをかいだ時
13．その他

かいだ時」、「鳥の鳴き声や虫の声などを聞いた時」、「木々の間を散歩している時」で、プラスの高い値をもつ選択肢と比べ、視覚以外の嗅覚・聴覚・触覚に関係がある選択肢といえる。またマイナスの高い値をもつ選択肢に、木に関係するものが多い。このことから、第１軸は、視覚とその他の感覚という五感の対照性とともに、動物と植物の対照性をも表わす軸と考えられる。

第２軸において、プラスの高い値をもつものは、「鳥やトンボなどの飛ぶ姿をみたとき」、「魚の泳ぐ川を目にした時」、「木や草の「緑」をながめた時」、「鳥の鳴き声や虫の声などを聞いた時」といった、事物をやや受動的にとらえた選択肢があげられる。マイナスの高い値をもつものは、「昆虫採集などで生物と接した時」、次いで「木々の間を散歩している時」、「水のせせらぎを目にした時」、「壮大な自然景観を目にした時」である。ここであげられる「～を目にした時」という選択肢は、「水のせせらぎ」や「壮大な自然景観」という日常目に触れにくいものと関係しており、他の二つの選択肢ともども、事物に接触するために積極的な行為を伴うものと考えられる。このことから、第２軸は、自然に対し、受動的に関わることを好む鑑賞型と、能動的に関わることを好む接触型の対照性を表わす軸と考えられる。

最後の第３軸において、プラスの高い値をもつものとしては、「昆虫採集などで生物と接した時」、「美しい花をながめた時」などがあげられ、日常的な事物と関係している。マイナスの高い値をもつものは、「水のせせらぎを目にした時」、「タヌキな

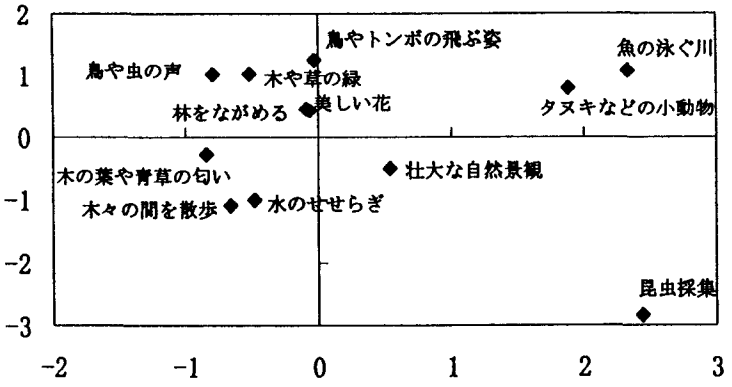

図４　第１軸（横軸）と第２軸（縦軸）のカテゴリースコア分布

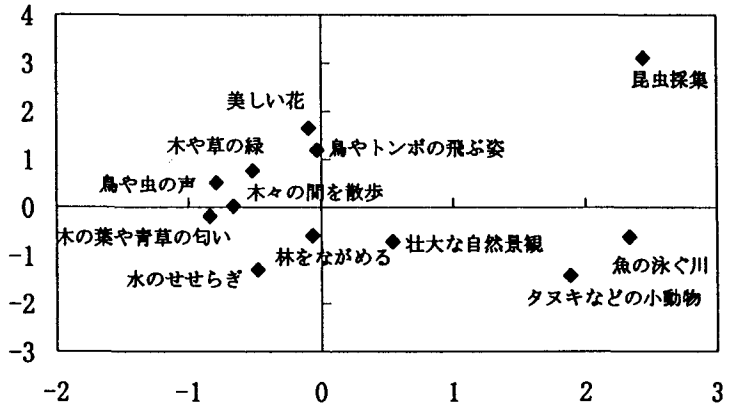

図５　第１軸（横軸）と第３軸（縦軸）のカテゴリースコア分布

どの小動物をながめた時」、「壮大な自然景観を目の前にした時」である。これらの選択肢では、日常見ることのない事物に言及する傾向がある。以上のことから、第３軸は、日常的な事物への嗜好と非日常的な事物への嗜好の対照性を表わす軸と考えられる。またこの軸は、通常見られる自然(事物）と、今後残し、保全していきたい自然の対照性を示しているとも考えられる。

以上３軸の解釈は、ほぼ同様の選択肢を用いて、神戸三田国際公園都市のニュータウン居住者の自然観を分析した研究（澤木、1995）において、「小動物－昆虫の軸」、「鑑賞－接触の軸」、「日常－非日常の軸」という自然観の対照性を表わす３軸が抽出されている結果と、ほぼ整合している。以上、数量化３類の分析により、「どんな時に自然を感じるか」という12の選択肢への反応が、大きく三つの基本的次元にまとめられることがわかった。

5．むすび

港北ニュータウンでは、公園、緑道、私有地(保存緑地)に、既存緑地を残した開発を行なってきた。このような緑地を残した開発は、居住者の港北ニュータウン居住地選択理由に、「緑が多い」、「自宅の周囲に緑がある」という回答が多いことから、居住者の住居選択志向と合致していた。しかし、ニュータウン計画が遅延したこともあり、公園や緑道といった公共用地の管理は不十分なまま取り残されてきた。居住者の、港北ニュータウンの緑の「量」への満足度が比較的高いのに対し、緑の「質」への満足度が低いことにも、このことは見て取れる。また、緑の「質」に満足を示している回答者においても、二次林を残したことに対しての評価は高いが、その管理状況については問題があるという自由回答がなされている。

住民参加のまちづくりが港北ニュータウンの特徴の一つになっているが、新住民は参加の機会が狭められていることもあって、自然環境保全の地域活動にまちづくりの方向性を見出そうとする人々がいる。地域活動は、従来、女性が中心となって行なわれており、港北ニュータウンにおいても、文化・福祉の面からまちづくりをとらえ、地域形成の一端を担っている女性の活動が見受けられる(影山、1998)。しかし、港北ニュータウンの自然環境保全に関わる活動には、男性の参加が活発にみられる。とくに、「港北ニュータウン緑の会」を中心とした会においてその傾向が強い。雑木林や竹林の間伐や下草刈りといった、体力を要する活動が中心となることもその理由にあげられるが、逆に、このような活動内容が男性の興味を引くことにもなっている。これは、会の活動参加理由に、「活動内容に興味をもって」という回答が多かったこととも関係している。

こうした活動に参加している人は種々の自然観を持っていることが考えられるため、数量化３類により自然愛護活動参加者の自然観を分析した。その結果、「視覚とその以外の五感の対照性」、「受動的(鑑賞的)関わり方と能動的(接触的)関わり方の対照性」、「日常的事物嗜好と非日常的事物嗜好の対照性」という三つの基本的次元から、自然愛護活動参加者の自然観が成立していることがわかった。こうした自然観に基づいて、自然愛護会の会員の中には、家の近くの自然を目で見て楽しむ人もいれば、視覚以外の感覚も使いながら、日頃あまり見かけない動物・自然に直接触れたがる人もいることになるのである。

最後に、港北ニュータウンにおいて自然愛護運動が展開した場所的背景を、同じ東京の西郊に位置する多摩ニュータウンとの比較において検討しておこう。1997年に両ニュータウンに住む20歳以上の男女300名強の人々に対して行なった住民意識調査によれば、ニュータウンに「緑が多い」と思うと回答した人は、多摩ニュータウンが回答者の３分の２であるのに対し、港北ニュータウンは回答者の半数にしかすぎない（福原、1998a、p. 35)。このような結果になる理由としては、港北ニュータウンの方が未だ開発途上にあり、むき出しの地肌を目にすることが多いからであろうと思われる。また、新住宅市街地開発事業の都市計画決定区域の公園面積率（1995年時点）でみても、多摩ニュータウンは約20%であるのに対し、港北ニュータウンは約10%（福原、1998b、p. 21）と、

港北ニュータウンにおいては公園の面積の占める割合が少ないことも関係しているであろう。せっかく郊外に緑を求めて移り住んでも、「緑が多い」と思わなければ、できる限り今ある緑を大切にしようと考えることは当然であり、その中から自然愛護運動に取り組む人が出てきてもおかしくないのである。

したがって、先の調査にみるように、街の将来像についても、多摩ニュータウンは回答者の各々３分の１が、「高齢者が安心して暮らせる街」と「緑溢れる静かな住宅街」を望んでいるのに対し、港北ニュータウンは半数の回答者が、「緑溢れる静かな住宅街」を望むことになる(福原、1998a、p. 55)。ニュータウンにおいて最も必要な対策としては、いずれのニュータウンも「自然環境保全」が第１位にあげられているが、多摩ニュータウンでは回答者の３分の２が、港北ニュータウンでは回答者の４分の３がそのように答えている(福原、1998a、p. 55)。そして、「自然環境の保全」が是非とも必要と回答した人は、多摩ニュータウンで約７割であるのに対し、港北ニュータウンでは約８割にも達している（福原、1998a、p. 45)。

このような港北ニュータウン住民の自然環境(とりわけ自然緑地)の保全に対する意識の高さに裏打ちされた住民の地域活動が、新しい住民ネットワークを生み、やがてそれが、影山（1998）が示唆するように、成熟したコミュニティの形成につながるとしたら、なんとすばらしいことではないだろうか。たとえ現時点でそうした意識が芽生えていなくとも、谷戸の地形を生かして造られた、自然水のせせらぎが傍らを流れる緑道は、日々そこを行き来する住民に、保全された自然と接する「作法」を自ずと教え込む「学習装置」として機能するのではないだろうか。住民意識が住環境を形作り、また住環境が住民意識を醸成する、そうした相互作用の延長上に新しいコミュニティが形成される期待感を抱かせる場所が、港北ニュータウンといえるかもしれない。

謝　辞

本稿を作成するにあたり、聞き取り調査にご協力いただいた「港北ニュータウン緑の会」や横浜市役所の方々、そして、アンケートにお答えいただいた住民の皆様に御礼申し上げます。

参　考　文　献

影山穂波「ジェンダーの視点から見た港北ニュータウンにおける居住空間の形成」,『地理学評論』71A, p.639–660, 1998.

片受　明・高橋理喜男「横浜市市街地環境設計制度で保全される自然緑地について」,『都市計画論文集』30, p.1-6, 1995.

上甫木昭春・池口　仁「ニュータウン内残存樹林に対する居住者の接触行動に関する研究」,『造園雑誌』57, p.175-180, 1994a.

上甫木昭春・池口　仁「ニュータウン内残存樹林に対する居住者意識に関する研究」,『都市計画論文集』29, p.373-378, 1994b.

港北ニュータウン事業誌編集委員会『港北ニュータウン四半世紀の都市づくりの記録』住宅・都市整備公団港北開発局, 1997.

児玉祐一郎・武内和彦「土地自然システムを生かした丘陵地の住宅開発」,『都市計画』150, p.68-74, 1987.

権　奇燦・安倍大就・増田　昇・下村泰彦・山本　聡「住民意識調査を通じたニュータウン内の保存緑地が保有する各種の効果に関する研究」,『造園雑誌』57, p.187–192, 1994.

澤木昌典「ニュータウン居住者の自然志向と居住行動に関する考察」,『造園雑誌』 p.181-186, 1994.

澤木昌典「ニュータウンおよび周辺地域の居住者の自然と緑に関する意識の比較」,『環境情報科学論文集』8, p.39-44, 1995.

永田和宏「住民参加による緑の保全　けやきが丘森林愛護会,鴨池公園愛護会」,『平成２年度日本造園学会全国大会シンポジウム・分科会講演集』p. 22–26, 1990.

春原　進・石綿重夫・小山潤二「都市開発と緑地（港北ニュータウンの公園緑地体系）」,『都市計画』109, p.44-49, 1980.

福原正弘『首都圏ニュータウンの現状調査－多摩・港北・千葉ニュータウン住民意識調査－』大妻女子大学社会情報学部人文地理学研究室, 1998a.

福原正弘『ニュータウンは今　40年目の夢と現実』東京新聞出版局, 1998b.

Key Words（キー・ワード）

Nature Protection（自然愛護），Environmental Conservation（環境保全），View of Nature（自然観），Hayashi's Quantification Model Ⅲ（数量化３類），Kohoku New Town（港北ニュータウン）

Local Societies of Nature Protection in Kohoku New Town, Yokohama, and Their Members' View of Nature

Yukari Takano*, Yoshio Sugiura**and Michiko Harayama**

*Self-Defense Forces
**Graduate School of Science, Tokyo Metropolitan University
Comprehensive Urban Studies, No.67, 1998, pp.45-63

Kohoku New Town, Yokohama, is famous for its town planning that land owners and leaseholders participate in the planning, but new-coming residents' requests were not enough taken into account in the planning. Of them, those who are interested in a town planning oriented to the natural environmental conservation have organized the local societies of nature protection. These societies are developing various activities such as observation and survey of nature and maintenance of parks and open spaces conserving natural vegetation. In order to grasp their members' view of nature, Hayashi's quantification model Ⅲ — a kind of qualitative factor analysis — is applied to the response patterns to 13 expressions related with affairs and situations through which respondents perceive nature, which are asked in the questionnaires distributed to a total of 81 members. It turns out that their view of nature is composed of the three fundamental dimensions: 1) a contrast between the sense of sight and the other senses, 2) a contrast between passive or appreciation-type concern and active or contact-type concern, and 3) a contrast between preference for daily things and preference for non-daily things. The results are similar to those of the study concerned with a case of a new town in Sanda City, Hyogo Prefecture.